

## 壽量五百塵點 に對する私見

望月本啓

- 中の異文會通と論結 一、聖祖の時代觀 一、三時と三學三重の相配及聖祖の判決 一、末法無戒の理由 (A)無戒と破戒 (B)末法僧侶の道德觀念如何 (C)佛教思想より見たる天災觀 一、國家と佛教 一、歴史と傳道方法 一、思想構成と歴史の研究 一、五義綱判と諸師の判教 一、國師とは何ぞ 一、國師の資格 一、國民教育と法華經 一、傳教の三時論と我祖の三時論 一、本未有善論と純圓論の差異及會通 一、太子鑒眞等の圓機説と我祖引用の意趣 一、念禪律興起の原因と其教法 一、念禪律破の根本意義 一、日本國と法華經 一、諸師の予言と日本及聖祖引用の意義 一、本朝傳來の佛教 一、南都六宗の興起と其前後 一、傳教の佛教思想と及其事業 一、南都佛教と傳教との關係 一、平安奠都と傳教との關係 一、念禪の勃興と其傳道區域と信者の種類 一、鎌倉の佛教と京師の佛教 (聖社諸宗對破の次第と各宗傳道の區域) 一、三類蜂起の時代 一、攝析論

(結)

宗祖大士無始本覺を述べ給ふに三あり(一)には本尊鈔に曰く『五百塵點乃至所顯の三身無始の古佛也』云々此れ本佛元能所二詮なしと雖も且く所顯の三身に約して無始の古佛也と宣せ給ふ本尊鈔略要に『五百塵點復過於此等は能顯の壽量あり無始本佛十界常住とは所顯の三身なり故に文を過て底理を指を乃至所顯と言ふなり』と即ち此の意あり。(二)には當體義鈔に『釋尊五百塵點劫當初証得』と是れ能顯の三身に約して且く當初と宣す、次下の『能證所證本理』の文思ふべし之れ密に非算の數に寄せて始即本を顯し給ふ文旨知るべし(三)に灌頂鈔に『雖無始本覺三身且立五百塵點劫成佛』文是れ能顯所顯能證所證二而非二一なる上に於て無始を論じ給ふあり、正義に曰く『且立塵點之語者塵點久成假之明文也』と誠に始覺即本覺の佛身は能顯所

顯共に無始久遠にして二詮あるべからず從て五百塵点の經說之れ全く實數なりと言ふべからず今教行人理に約して私見を述べむ。

(一)約教 夫れ本有の身土は無作本覺の如來と常寂光の外ある事なし然るに衆生此の本覺に迷ひ隔歴彼我の思を生じ善根轉だ少く惡趣日に月に多きを加ふ是れに由て本佛權に聖相を現じ積切累徳し成道し以て衆生成佛の指南とちし修因感果の手本とちらせ給ふ當体義鈔に曰く『釋尊五百塵点劫當初証得此妙法蓮華世々番々唱成道顯能証所証本理給』と即ち知ぬ難解難入の法華の深意凡夫の得て悟入すべきに非ず依て久修練行を説きて以て衆生をして佛尙是の如し況や凡夫わやと自ら勇猛の心を起し速に悟の本心に歸らしめんとし給ふに外あらず依て知ぬ五百塵点劫數を立る事全く衆生教化の方便なり『每自作是念以何令衆生得入無上道』の文思ふべし況や五百塵点は之れ算數の及ぶ處に非ず加ふるに復過於此百千等之れ全く一二三と數ふる順序にして三二一の限數に非ず誠に本覺三身

は豎に又横に際限なく十方法界の身なり唯だ凡夫の迷晴に隨ひ假りに五百の非數を擧げ伽耶始成の忘謂を破し前後の儀相に寄せて如來の本壽本身を覺らしめ給ふ即ち事成院日壽師の所謂『迹本の間寶塔涌現し多寶証明し分身來集して密に壽量を表し又地涌を召し本地身を示す而して近成を破して五百塵を擧ぐ慙懃ある事是の如し』と之れ其の意なり又法華眞言勝劣事の中に『伽耶之始成破之五百塵点也』と仰するもの全く此の意に外あらざるあり。

(二)約行 法華の妙行は妙法蓮華經を持つに外あし本尊抄に曰く『我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を讓り與へ給ふ』と又次上の文に曰く『釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す』と我本行菩薩とは之れ本因妙なり吾等凡夫一度南無妙法蓮華經と稱ふる時は所謂『如我等無意』即ち吾等凡夫即妙法蓮華經かり依て知ぬ我本行菩薩道とは之れ吾等妙法五字を唱ふる刹那かり五百塵点とは菩提樹下の釋尊成道の時なり

若し釋尊行化に約せば壽量顯説の刹那からずんば  
あらず若し衆生の修行に約すれば唱顯の刹那に於  
て五百塵點ならざるべからず

(三)約人 經に曰く『是好良藥今留在此』と此の  
良藥とは無作三身の妙法蓮華經なり吾等衆生是れ  
を信解してこの無作三身を体得す而も妙法蓮華經  
は之れ五大を表示す然るに吾等十界の衆生亦五大  
の所成にして吾等を離れて別に無作三身の妙法蓮  
華經存するに非ず吾等凡夫の當体は之れ妙法蓮華  
經にして其の体十方法界に週遍して物として我身  
に非る事なしこれを覺るを本覺の如來と言ふ本覺  
三身如來は之れ生滅の身に非ず本尊抄に曰く『佛  
既に過去にも滅せず未來にも生せず所化以て同体  
なり』と即ち知ぬ始覺即本覺の如來に於て生滅あ  
るべからずと生滅無きの佛に始めを論すべからざ  
るや論なし依て五百塵點とは非算の數を擧げて以  
て無始を形容せるなり。

(四)約理 夫れ如來壽量品の一品に於て其の文上  
文底所詮二義を成ずる事ある事なし然るに若し文

上能顯の三身其の壽ありとせば文底無作本覺の如  
來と相即融通を論ずる事能ざるべし然れば則ち能  
顯の三身に約して新成顯本を許すべからざるに至  
り所顯の三身に於ては事成無作を顯し修因感果を  
示す事能はざるべし而も文上五百塵點と説き文底  
無作本覺なりと云はんには文意別にして永久に相  
即を論ずる能はず五百塵點假立なりとせば文意一  
往別なるか如しと雖も再往文意顯れ義を成する時  
即ち二詮なきなり何となれば佛意無始久遠を説く  
に在りと雖も且く伽耶始成の近情を破せんが爲に  
五百塵點の切數を擧げ文始成を存するが如し然れ  
共此の文意顯を終て無始久遠の一實義と成するな  
り。

上來身の不學をも省ず自己の所信に隨てのみ書  
き連ねたるを以て誤謬に誤謬を重ねたるか如きも  
のかるべきを信ず。此れ大方の高教を仰ぎて以て  
後日の大成を期する所以なり。尙又此の五百塵點  
假實の論は台當二家教學上の中心たり生命たり根  
本問題たる顯本論に附隨して重要なる問題なるを

以て之れが研究に付ては吾宗諸先師の所説及び台當異目等に付ても十分の研究を要す従て一紙半箋の克く盡す所に非ざるが故に之れが研鑽は先達の高教に従ひ以て他日に期せんと欲す。(なほり)

### 論妙法五字與 三大秘法係關

(承前)

藤田光肇

第貳節 本門の題目

題目とは二意あり 所謂正像と末法と也 正法には天親菩薩龍樹菩薩題目を唱へさせ給ひしかども自行ばかりにしてさて止ぬ 像法には南岳天台題目計り南無妙法蓮華經と唱へ給ひし自行の爲にして廣く他の爲めに説かず是理行の題目也 末法に入つて今日蓮が所唱題目は前代に異り自行化他に亘りて南無妙法蓮華經なるべし名体宗用教の五重玄の五字也 (縮二〇五三)  
此れ吾人が三時の異相の章下に於て略説せるが

如く、龍樹等の如く『法華論』『大論』等を作りて、題目を讚美したれども是れ文相のみなるべし。天台傳教等、盛に法華經の幽玄なる妙義を談じたれども但題目は實相の眞理に至るの近道となし、其立行たる但一心三觀を正行として、信心唱題の妙行を奨めず。設ひ唱題の事ありしも自行ばかりにして化他に出でず。何故に龍樹天親等天台傳教等題目を自行計にして、廣く化他の爲めに説かざりしかと云ふに、即ち

答此に二意あり一は時の至らざるが故に 二は付囑に非るが故也凡妙法五字は末法流布の大白法也 地涌千界の居士の付囑也 是故に南岳天台傳教等内に鑑て而末法の導師に讓之不二弘通給也 (縮一〇〇〇)

此二意既に吾人が付囑の起盡三時の異相の章下に於て述べたり。故に是れと對見して祖意の所存窺ひ知るべし。而して末法に本化所弘の題目は釋尊の因行果徳の二法を具足せる功德甚勝なるものにして是れ本門の題目の體相なるべし。